〒606―0015　京都市左京区岩倉幡枝町665の5　☎075・706・5083　http://michibushinbito.ecnet.jp/

ノンフィクション作家

地球村に架ける橋

道普請人（みちぶしんびと）

自分たちの道は自分たちで直す

土のうで整備、変貌に歓喜

高賛侑（コウ チャ ニュウ）

雨が降る。道がぬかるむ。と、車が通れず、田畑の収穫物を運搬できなくなる。村人は天を仰いで嘆き、一層の貧困に苦しむ。

発展途上国の村々で繰り返される負の連鎖。国にも村にもカネがないため道を舗装できない、という深刻な問題に劇的な解決策を開発した人がいる。その手段は、ただの「土のう」である。

「土のうは非常に性能のいい建設材料になります。袋に土を入れて固めるだけで大きな耐荷力を持つんですよ」と語る木村亮（あきら）さん(49)の口調には自信がみなぎる。NPO法人「道普請人（みちぶしんびと）」理事長の彼は、土木工学を専門とする京都大学教授であり、かつてサハラ砂漠などを自転車で縦断した冒険家でもある。

93年、JICA（国際協力機構）がケニアに農工大学を設立する事業に加わり、10年間教師や学生を育成した。が、生活苦にあえぐ人々にとってすぐに役立つ方法論を示し得ないジレンマがつのった。ある日、国際協力に尽力する教授が言った言葉が胸に突き刺さった。「高度な技術を利用するのは困難だから、簡単な方法を考えなさい」

ごく簡単な技術で人々を幸せにするにはどうすればいいのか。5年間模索を続けた。その過程でひらめいたのが土のうだった。京大博士課程にいた福林良典さん（現・理事）と共同でキャンパス内に模擬道路を造り、試行錯誤を重ねた。

パプアニューギニアに住む日本人女性から「ゲチャゲチャの道を直す方法はないか」というメールが来たのは05年のことだった。現地に赴き、土のうによる道路整備を実践した。

その工程はこうだ。村人を集め、同じ大きさの袋に土や砂利を入れる。凸凹になった農道の表面を少し掘って土のうを並べる。重要なポイントは、木槌（きづち）や太い枝でたたいて締め固めることだ。その上に土をかぶせ、道の両脇に排水用の溝を掘る。これだけの作業で見違えるような道路が完成するのだ。

普通、道を1キロ改修するのに、アスファルト舗装なら5000円以上かかるが、土のうなら数百円ですむ。村人たちは自力で道を造り上げた喜びに沸く。

「日本には昔から、住民が協力して生活道路を改修する『道普請』という精神がありました。誰かの援助に頼るのではなく、『自分たちの道は自分たちで直せる』という発想の転換が大切なんです」

続いてケニアやフィリピンでプロジェクトを推進した後、07年に正式にNPO法人を立ち上げた。

同年、ウガンダで青年海外協力隊とともに2キロの農道に取り組んだ。そこでは雨期になるとトラックが通れなくなるため、稲を自転車で運ぶしかなかった。現地で3日間、作業を指導した。村人は当初、半信半疑で集まってきた。彼らの表情には、大雨の前ですべのない絶望感がこびりついていた。

ところが作業が始まると目の色が変わった。女性や子どもも我先に土のうを作り、頭や肩に載せて運んだ。積年の涙が染み込んだ泥道がみるみるうちに変貌する様に歓喜の声を上げた。

「土木の専門家の中には、そんなやり方ではダメだという人もいます。でもわたしは『いつまでもつのか』と聞かれたら、『ダメになるまでもつ』と答えます。何年もつかは関係ない。ダメになったら住民が造り直せばいいんですから」

いま道普請人には東ティモール、タンザニアなど各国から引き合いが来ているという。

「わたしの目標は『Do―nou』を世界語にすることです」という木村さんの夢は着実に実現しつつある。

土のうの利用という、まるで「コロンブスの卵」のような発想の転換によって道路も橋も堤防も造ることができる。まず海外支援活動に従事する人々から土のうの普及に尽力すれば、世界の生活環境は大きく改善されていくに違いない。

ウガンダで土のうによる道路改修作業を行う人々

「千字文」（チョンヂャムン）から「金生麗水」　―イラスト・姜　孝薇